

第百九十七話 大東亜戦争肯定・否定論

戦後、日本悪玉論が蔓延る中で、転向作家林房雄氏の「大東亜戦争肯定論」が昭和38年9月号の中央公論紙上で発表（～40年6月）され、一大反響を巻き起こした。この頃から、大東亜戦争肯定論とアジア侵略の太平洋戦争論の対立が激化したと云える。

1 大東亜戦争肯定論等について

林房雄は、大東亜戦争の開始を1845年（弘化二年）とし、西欧勢力の東漸に対する反撃として“大東亜百年戦争”を本質は解放戦争であり、欧米列強によるアジア侵略に対するアジア独立のための戦いであった、とした。

中村燦（元独協大学名誉教授）は、その書「大東亜戦争への道」で、門戸開放主義を巡る日米抗争及び共産主義との戦いという大きな筋道を探り当て、この二大潮流が合して高まる極頂点に大東亜戦争が定位すると喝破した。これらに対する否定論者からの反撃も激烈であり、未だに肯定・否定論争が続いている。著名な保守論客福田恒存は、『自分は大東亜戦争否定論の否定者』との名文句を吐いたとされる。

2 代表的な肯定・否定論等

(1) 東京裁判史観

本戦争は、極東国際軍事裁判で、「日本の軍国主義者の共同謀議による侵略戦争」であったと断罪し、その洗脳教育故に、自虐史観とも呼ばれる。東京裁判でインドのパール判事の日本無罪論は夙に知られている通りである。

(2) マルクス主義史観

戦争責任を東京裁判が認定した一部軍国主義者と言うより、明治維新以来の近代日本の資本主義に内在する問題であるとし、大東亜戦争を帝国主義相互、ファシズム対反ファシズムの戦い、被支配民族による解放戦争との枠組みで捕らえようとする。余りにもドグマティック、イデオロギー色が強烈だ。侵略の必然性を主張するが、無理があるのではと考える。

(3) 自衛戦争史観（大東亜戦争肯定論）

戦争を欧米の圧迫に対する自存自衛のための戦いであり、且つアジア解放の戦いであったとする捉え方である。次のような著作があるが、ニュアンスの差は多々だ。大東亜戦争無罪論（林房雄）、大東亜戦争への道（中村燦）、国民の歴史（西尾幹二）、日本国記（百田尚樹）、アジアを解放した大東亜戦争（安濃豊）、日中戦争は中国の侵略で始まった（阿羅健一）、黄文雄の大東亜戦争肯定論、新大東亜戦争肯定論（富岡幸一郎）等がある。アジア解放が目的か結果なのかを問う声もある。

(4) 自由主義史観

上述（1）～（3）の何れにも与しないとの立場から、藤岡信勝氏が提唱した史観で、左翼的な史観に疑問を投げかけ、批判する。新たな見解を多く示した功績は大。

(5) コミンテルン陰謀史観

モスクワの指導の下、1920年テーゼに則り、陰謀を巡らし、日米相戦わせるように仕組んだというものである。本戦争で誰が一番得したかを考えると一目瞭然？

(6) その他、百家争鳴の一部：戦争相互責任論（同罪論）、軍事的敗北なるも戦争目的達成論、現代価値観で過去を裁く事の不可論、日本人の歴史認識の希薄さ嘆息論、上山春平の流れを汲む信夫清三郎の触媒説、人種戦争論、殉国史観、明治期は正しく、昭和期は誤ったとする司馬史観、引き摺られ・宣戦なき戦争に嵌まった戦争論

何れも一面の真理を含んでいと云えよう。

(7) 「戦争呼称」から歴史認識が推測される。細部は割愛する。

* 国家としての歴史認識を確立すべきであり、国家として当然の権利・義務である。

（第百九十七話 了）